

ロバート・バートン  
『憂鬱の解剖』  
第3部 第2章 第2節 第4 - 5項

岡 村 眞紀子  
伊 藤 博 明 訳

第2章 第2節 第4項

時、場所、逢瀬、対話、歌、舞踏、音楽、  
艶話、愛の対象、接吻、親密さ、  
証拠、贈り物、賄賂、誓い、不服、涙、  
その好機の有無。

今まで述べてきた誘惑はすべて遠く、距離のあるものであった。ここで、他の段階の愛——逢瀬、接吻、情交、対話、歌、舞踏、艶話、愛の対象、贈り物、など——について話を進めようと思うが、それらはまるで何人ものセイレンが男や女の心を奪い去るようなものである。というのもタティオスが『クレイトボンとレウキッペの恋の話』第2巻〈4〉で述べるように、「眼だけでは娘の恋情を試してみるのに充分ではなく、もっと有効な事々を言い、同様に有効な手段を用いねばならない。ゆえに娘の手を取り、指をきつく組み合わせ、同時に溜息をついてみよ。もし彼女が快くそれを受け容れ、それほど嫌がっていないように見受けられたなら、彼女を恋人と呼び、うなじに手を回して接吻してみよ、云々。」これが功を奏さなかったら、押して、引いて、また押してみよ、ただそれが二人にとって初めて出会ったり、初めて一つ屋根の下に暮らしたのであるなら別の話である。手紙とか賞讃とかいった外目に解る仕草や行為は、さらに有効であろう。しかし、二人が同じ村に、同じ通りに、あるいは同じ家にといった具合に、互いに近くに住んでいた場合には、突然愛に火がついたりする。この機会の有無ゆえに使用人が主人の娘を誘惑し、洒落者が野暮ったい娘に恋をし、高貴な男が奥方の侍女に走り、アリオスト『狂えるオルランド』28. 34-38.）で王妃が小人に執心するように、高貴な女性が従者に溺れることもあり、多くの男女があまりに性急に恋仲になってしまう。それまで経験のないままに、他人と出会い、多くの場所が見せる諸相を眼にして、自分を他の者と比較したなら、だれか一人を他の人より上に見てしまうことなどなかった人をも、そんな出会いが否応なく恋に走らせたのだった。またそれまで男女の対話や懇ろにする機会がなかったならば、より良い他の選択肢もなく、他の人に眼が行かなかったゆえに、どうしようもなくその人へと駆り立てられてしまったり、熱血、怠惰な暮らし、

飽食などのゆえに隣にいる人に愛狂いしてしまった相手を、毛嫌いしたり咎め立てたりしてしまうこともあっただろう。最初出会ったときには気にいったり愛したりすることなく、[シェイクスピアの]喜劇〈『空騒ぎ』〉でのベネディクトとベアトリスのように、互いの態度に気を悪くしたり、多くの欠点を見つけてしまって不快になったり、仲たがいしそうであったとしても、一つの家に住み、逢瀬や接吻や抱擁といった誘惑を重ねるうちに、ついには常識を超えるほどに互いに惚れこむに至ることは幾度もある。

それはポティファルの妻がヨセフスに、あるいはクレイトボンが叔父の娘レウキッペに否応なく執心してしまった最大の原因であった。というのもビザンティンでの疫病が流行っていて、クレイトボンがしばらくレウキッペと一緒に逗留することとなり、食卓で隣の席についたのが幸運だったからである。タティオスの〈『クレイトボンとレウキッペの恋の話』〉第2巻でクレイトボン自ら語っているように（この話は作り話であるが、十分な観察に基づき、恋する者の感情を良く表現している）、彼女の手を取り、その後口づけし、胸をまさぐることができ、それゆえに彼は気も狂わんばかりであった。弁論家イズメネオスはエウスタティオス〈の『恋するイズメネとイズメネオス』〉第1巻で、同じような告白をしている。初めてソステネスの家に来て、友クラティステネスと食卓についたとき、ソステネスの娘イズメネが、

足は素足、胸は露わ、腕はむき出しで

[マントヴァのパティスタ 〈『牧歌』1.73.〕]

当時のギリシアの流儀に従って給仕し、

——腕は半分以上覆うものなく、

[オウイディウス 『変身物語』1. 〈501.〕]

ダブネがポイボスから逃げたときのような装いで（それがイズメネオスの心を動かしたのだが）、彼に酒を注ぎ、給仕しようとしながらも、イズメネの眼——問いかける眼、語る眼、言い寄る眼、誘う眼——は彼から逸らされることはなかった。彼女はたえず彼に微笑みかけ、二人が立ち上がったとき、それを彼女はちょっとした機会と捉えた。「彼女はやってきて彼のために乾杯し、そのうえ彼のつま先を踏み、何度も行ったり来たりし、仲間がいて話せないときは彼の手を握りしめ」〈エウスタティオス『恋するイズメネとイズメネオス』第5巻〉、彼に出会うと頬を染めてみせた。この方法で、まず彼を攻略した。（「酒を飲みながら、私は愛をも同時に飲み干したのだ」と書かれているが）彼女は盃に口づけし、その盃で彼に乾杯し、微笑みかけ、「彼が飲んだ盃の、彼が口を付けた側で飲み」、それによって互いに身体を寄せ、接吻し、手を握り、足を軽く踏みなどした〈第5巻〉。私は長い間酒をちびちびと飲んで飲んで、ついに突然恋に酔い痴れてしまい、「娘自身を飲み干してしまったように思われた」〈『同書』第4巻〉。アリスタエネトス〈『恋愛書簡』〉

でのピロコスは、まったく見知らぬ美しい娘にたまたま出くわし、彼女の方を振り返ってしまった。彼女も彼の方を振り返り、おまけに微笑んだ。

かの日は死への最初の日、その日が厄災の  
原因であった――。

[ウェルギリウス『アエネイス』4. <169-70.>]

おお、甘言を信じるのは安全ではない。

[プロペルティウス <『詩集』1. 15. 42.>]

それは、もっと先の出逢い、そして彼を滅ぼすことになる愛の、唯一の原因であった。この時と場所との好機は、その状況と相俟って、とても抗いがたい動機となるので、同じ年頃の若い二人にとって一緒に暮らしながら恋に落ちないのはほとんど不可能であるが、特に、この上もなく怠惰に裕福な暮らしを気ままに送っていて、他に何もすることのないような、貴族の宮廷のような大きな館においてはそうである。

かのヒッポリトスを置いてみよ、彼もブリアポスになるであろう。

[オウィディウス『愛の歌』第2巻第2歌 <正しくは第4歌32.>]

アキレウスは、母親のテティスによってエーゲ海の（リュコメデスが治めていた）スキュロス島に、成人するまで養育されるべく送られた。それはトロイア攻略の際に殺害されるという、恐ろしい信託の運命を避けるためでもあり、女の身なりで王の子供たちと一緒に女部屋ギユナエケウムで育てられた。その後何が起こったのか知っているだろうか。彼は王の美しい娘デイダメアを抱き寄せ、彼女との間にピュロス（本名ネオプロトモス）と名付けた優れた息子をもうけた。哲学者ピエール・アベラールはこの物語を自分自身を重ねて語っている。彼女の叔父フルベルトゥスからその可愛い姪エロイーズを教えるように依頼されて、そのために彼の家に逗留し、（彼自身の言葉を使えば）「柔和な子羊を飢えた狼にさらす」<『書簡集』1. 6.> ことになった、すぐに彼は彼女の色よい意志を受け取り、「言葉よりも多くの接吻が交わされ」<同書>、他のどんな訓話より愛について読み取ったのであったが、そのような些細な行ないから機会を求めることができるのである。「最初家に同居することから、そこから魂の合一が生じる」<同書>。しかし私の言葉で言えば、夜、ワイン、若さが揃えば、夜は愛と休息の共謀者ということにもなり、彼らが耳の上、頭まですっぽり愛に陥らない方が不思議である。それというのも若さは愛に親切で、容易な素材、非常に可燃性の高いもの、ナフサそのもの、愛の火の燃料、すぐに愛に火をつけるからである。もし普通の家に7人の使用人がいるとすれば、健康な状態で少なくとも3組の男女関係ができるだろう。怠惰な者たちのあいだで他に何が起こりえようか。アレティーノ<『ナンナとアントニアの話』

バルト訳『ボルノディダスカルス』でのルクレティアは、「わが運命の精華のうちに、富み、美しく、若く、とても善く育てられて、ローマに暮らし、わが振る舞い、年齢、美、富ゆえに、世の中はみな私を褒め称え愛した」と言っている。夜だけで、そのひとつの機会、すべての者を燃え上がらせるのに充分であり、大きな館に住む者たちはきわめて巧妙に、夜から最大の利益を得る。多くの淑女たちは、自らの欠陥、化粧、ペテンのゆえにやましく思っている、日中に見られることを望まず、カスティリオーネ [『宮廷人』第1巻] が記しているように、夜間に「ヤマネのように日の光を嫌い、何ものにまして松明の光をむしろ好み」、そして、日中、戸外に出なければならないときは、[粗悪品を商う] 織物商の店内のように、きわめて暗く、かすかな光明を熱望する。このことについては充分な理由がある。すなわち、「欠陥は夜に隠れる」〈オウィディウス『恋愛術』2.249〉からであり、多くの愛に溺れた間抜けは、この手管によって囚われる。ゴメス・ミエデスは、『機知について』第3巻第22章において、妻にひどく騙されたあるフィレンツェの貴紳の例を挙げている。彼の妻は、指輪、宝石、ローン、スカーフ、絹、黄金、スパンコール、そして派手な装飾によって、自らが光り輝くように見せたので、若い夫は彼女のことを女神と思ったほどだった(というのも、彼は妻を松明の光の下でしか見たことがなかったからである)。しかし、婚礼の儀が終わり、翌日の朝、装飾具を外した彼女を、白日の下に見たとき、彼女はひどく醜く、痩せ、黄色く、皺だらけ、等々だったので、彼女は彼の眼には野獣であり、彼女を見つめるのが耐えられないほどだった。このような縁組は、しばしばイタリアにおいて行われており、そこでは彼らが求愛する機会は教会に行くときだけである。あるいは、トルコにおいては、彼らは遠くから互いを見るだけで、結婚に至るまでは、言葉をほとんど、あるいはまったく交わさないのである [ブスベク『トルコ大使の四通の書簡』]。サルディが『諸民族の慣習と祭儀について』第1巻第3章で、またハンス・ベームがスパルタの老人たちについて語っているように、「花嫁は寝室に自分の髪で覆われて連れてこられ、花婿が入ってきて結び目をほどくが、彼が彼女によって父親になるまで、日中はけっして彼女を見てはならない」〈『あらゆる民族の慣習』3.3〉。わが国より暑い諸国においては、今日、これらは一般的な慣例であるが、われらが北方の地域の、ドイツ人、デンマーク人、フランス人、ブリテン人、そしてスカンジナビア地方や他の地域の人々において、我々はこのような事柄についてより大きな自由を認めるのであり、ベームが述べているように、我々は花嫁と花婿に、会う際と別れる際の接吻を許しており、「放縦に振る舞わないかぎり、居酒屋に連れて行き」、楽しく話し、遊び、戯れ、歌い、踊ることを許している。クリュソストモス [『同衾に反対する説教』]、キプリアヌス、ヒエロニムスは、それに反対して厳しく語っているが、しかし、このことは誤ってはいない。しかし、酔っ払った者同士の縁組、ふしだらな会合、あるいは、たがが外れた宴会において一般に見られることは、その濫用である。ヒエロニムス [『書簡集』第2巻〈『書簡集』117「ガリアに滞在している母と息子へ」〉] が述べているように、「ある若い、顎髭を刈り込み、その先端を尖らせた者が、大勢の仲間とともにやって来る。歩こうとするあなたを、彼は腕をくんで引き留め、あなたの指を握りしめ、こうして、誘惑され、また誘惑することになる。ある者はあなたと酒を乾杯し、別の者は抱きしめ、三番目の者は接吻し、

その間にヴァイオリン弾きは演奏し、あるいは淫らな歌を披露し、四番目の者はあなたをダンスへ誘う。ある者は身振りと手振りによって語らい、あえて言わないでいることは、情熱によって表わす。このような快樂の、きわめて多く、きわめて強い誘惑の間で、欲望はもっとも厳格で気難しい精神を打ち負かす。そして、宴会と娯楽、あるいはこのように大きな集いの中で、人間が誠実に生きることはほとんどできない」。というのは、ヒエロニムスが続けるには、「彼女は傍らを、衣服を波立たせながら歩き、男たちの目を惹きつける。彼女の靴は鳴り響き、胸は紐で引き上げられ、引き締められた腰は彼女を小柄に見せ、きつく帯で締められ、髪は耳のところから束ねずに垂れ下がり、ときおり外衣は滑り落ち、ときおり両肩を見せるために留まる。あたかも見られたくないがごとく、慌てて両肩を覆おうとするが、それは彼女が望んで見せたものである」。そして、宴会、遊興、野外劇、そのような集まりではなく、クリュソトモス [「同衾に反対する説教」] が抗議しているように、これらの術策が実行されるのは、「教会の儀式のとき、そしてまさに聖体拝領のとき」なのである。もしこのような、愛の黙した誇示、合図、より曖昧な示唆がかくも心を動かすのであれば、歌い、踊り、接吻し、抱擁し、話術と遊戯のあらゆる方法を用いることが完全に許されている者たちは、いったい何をおこなうだろうか。あらゆる方面から包囲されている者は、いったい何をおこなうだろうか。

薔薇色の乙女たちがかくも望む者に、  
上品な婦人たちが欲する者に、  
あらゆる愛は、至るところに、どこにおいても、いつでも、  
あらゆるアモル、ウェヌス、ヒュメンは言い寄る。

[ポンターノ『バイアエ』第1巻〈「同郷人ナポリのペトロへ」9-11.〉]

いったい彼はいかに耐えるだろうか。彼女たちの声の調子は、麗しく心地よい演説は、彼女たちが用いる気取った調子は、それ自体で、若い男を捉えることができる。さらに、明敏な機知が、技巧と雄弁が、魅了する演説が、心地よい言論が、甘美な仕草がそこに加われれば、セイレンたちでも、このように魅了することはできない。パオロ・ジョーヴィオ [「諸地方、諸島、諸地域点描」] は、この種の事柄において卓越した能力をもつことで、他のすべての国民に増して、イタリアの女性たちを、その中でもとりわけフィレンツェの淑女たちを誉め讃えている。ある者たちはむしろ、ローマとヴェネツィアの宮廷女性を好むが、彼女たちは、聖人を打ち負かすことができるほどの、心地よい舌と優雅な弁論 [オウイディウス『恋愛術』第3巻〈315.〉] を具えている。

彼女の顔よりも声が多いの者たちを魅惑した。

〈オウイディウス『恋愛術』3. 316.〉

「彼女は、声の大なる加護によって、評判を得たのだった」とペトロニウスは、猥褻きわまり

ない断片で述べているが、私はこのことを彼の『サテュリコン』の一節によって理解している。すなわち、「かくも甘い音色が空気を魅了したので、あなたは、そよ風の中で、セイレンが協和して歌っていると考えたのだろう」〈127〉。「おお、善なる神よ、ライスが話すとき、何とそれは甘美なことか」と、アリストエネトス〔『恋愛書簡』第1巻〕において、ピロコルスは叫んでいる。美しい若い淑女がヴァージナル、リュート、ヴィオラを演奏し、それに合わせて歌うのを聞くことは、ゲリウスが〈『アッティカの夜』第1巻第11章で述べているように「愛する者たちの歓喜」であり、どうしても大きな誘惑とならざるをえない。パルテニスはそれに捕らわれて、

あの声が貪欲な耳から私の魂を引きだした。

おお、妹ハルペドナよ（と彼女は嘆いている）、私は誘惑されました。「何と甘美に彼は歌うのでしょうか。私は大胆な言葉を発してしまいます。彼は、私の人生の中で出会ったもっとも素敵な方です。おお、何と甘美に彼は歌うのでしょうか。私は彼のために死にます。おお、彼が再び私を愛してくれるならば」〔アリストエネトス『恋愛書簡』第2巻第5番〕。ルキアノス〔『絵画論』〈14〉〕が述べているように、あなたは彼女の歌を聞くだけで、「父も母も忘れてしまい、友人も見棄てて、彼女に従うだろう」。ヘレネは、その甘美な声と音楽のゆえに、詩人テオクリトスによって、誰も彼女ほどに上手に演奏することはできないだろう、と高く誉め讃えられている〔『牧歌』18.〈35〉〕。そして、ダプニスもまた、同じ『牧歌』において誉め讃えられている。

ダプニスよ、あなたの顔は何と甘美なのか、声は何と愛らしいのか。

あなたの歌声を聞いている方が、蜂蜜を舐めるよりも喜ばしい。

〈『牧歌』8.82-83〉

甘美な声と音楽は強力な誘惑である。プルタルコス〔『愛をめぐる対話』〈9〉〕が伝えるように、あのサモスの少女の歌手、アリストニカ、オナンテ、アガトクレイアは、「王冠を戴く者たちを手玉に取った」。

アルゴスは百の眼で覆われた頭をもっていた。

アルゴスは百の眼をもっていたが、一本の単純な葦笛によってひどく魅了され、自分の頭を失った。タティオスの書〔〈クレイトボンとレウキッペの恋の話〉第2巻〈1.〉〕で、クレイトボンはレウキッポスの美しい調べに嘆く。「彼はたまたま彼女がリュートを奏でるのを耳にして、それに合わせて恐らく古いアナクレオンの詩から採った一篇の美しい歌「ロサへの賞讃に倣って」を歌った。

ロサ、花々の栄光、誉、  
ロサ、神々の華、芳香、  
ロサは、男たちの悦び、  
三美神の華、  
愛の花咲く時には、  
ウェヌスの麗しの女性のなかの女ロサ……。

〈『アナクレオン風詩集』44〉

こういう結果になるべく、愛らしい娘は金の絃の豎琴やリュートで(どちらかは良く知らないが)、流れるような歌を奏で歌い、それが男たちを狂喜させ、「虜にした」。それは、メディアを悦ばせたイアソンの美しさ、そして同様に話しぶり、あるいは他の彼の良き点であった。

——実に、魂は  
姿と甘き言葉に捉えられた。

〔アポロニウス『アルゴナウティカ』第3巻〈1140-41.〉〕

アントニウスを籠絡したのは、他のいかなる誘惑にも増してクレオパトラの甘美な声であった。

言葉は男を縛り、綱が牛の角を縛る。

〈ヴァルタ編『格言集』33064.〉

「彼女の言葉は火のごとく燃え」（『集会の書』9.10.）、ロクソラナはソリュマン大王を魅惑し、またショアの妻はこの武器を使ってエドワード4世を魅惑した（R・S・シルヴェスタ『リチャード3世伝』）。

彼女は独り、万人からウェヌスの魅力すべてを自分のものとした。

〔カトゥルス〈『詩集』86.6.〉〕

チョーサでのバースの女房は、この手管を経験から学んだと告白している。

財産を求める奴もいる、  
姿形を求める奴も、見目麗しさを求める奴もいる、  
歌えて踊れる女を求める奴も、  
優しさを求める奴も、愛の戯れを求める奴もいるさ。

〈『カンタベリ物語』「バースの女房の話」前口上 257-60.〉

ピエトロ・アレティーノではルクレティアが自分についてもっと詳しく話している。「私は誠実さを装いました、あたかもウェスタの巫女よりも純潔な処女であるかの如く。私は、とても遠慮がちで貞潔な妻のように見せかけました。そして私を眼にし耳にする方が、心奪われ、魅惑され、たくさんの木の幹や石のように身動きできなくなるような、仕草、声音、話しぶり、溜息、身のこなしを付け加えました」〔『ナンナとアントニアの話』〕バルト訳『ボルノディダスカルス』。多くの愚かな貴婦人たちをこのようなことに浮かすのは、騙されては闊歩する連中、あの始終嘘を言う貴人たちのお気に入り、にぎやかに歌い踊るキュベレの神官たち、役者の滓か端役ぐらいしかできない〈テレンティウス『宦官』の〉トラソごときの〈アリオスト『狂えるオルランド』の〉ロドモンテや〈プラウトゥス『法螺吹き軍人』の〉ボンボマキデス、中身空っぽの大法螺吹き、図々しい出しゃばりたちで、彼らは、ルキアノス〔〈『著作集』〉第4巻『娼婦の対話』(13.)のレオンティコスよろしく騎士や殿方の論戦の席で他人の旅の話や勇敢な冒険譚やつまらない噂を語ったり、騎乗の技を見せたり、古い舞蹈曲を歌ったり踊ったり、優雅に流行の衣装を着こなしたりできる連中である。魅力的で美しく身分も高い男性、体裁良き美男子、そんな男を誰が愛さずいられようか。彼女は、友達がみな「だめ」と言おうと、彼とともに物乞いをする事になろうと、彼を手に入れるだろう。「ガリアのアマデイス」、「オリバのパルメリン」、「太陽の騎士」〈いずれもボダン『歴史認識方法論』に収録〉などの愛の小話を読んで火が付く〔タティオス『クレイトボンとレウキッペの恋の話』第1巻〈5.〉〕人もあれば、様々な愛の営みの体位で娼婦ヘレナスを描いた古のアスチャナッサ（スーダに拠る）や、その模倣のピレニスやエレパンティンのように、恋人たちの話や、その姿の描写、淫らな会話を耳にして火が付く人もいる。あるいはまた、(プルタルコス〔『英雄伝』「クラッスス」32.〕が語り)、クラッススの軍隊で戦利品に混じってペルシア人が見つけたというアレスティディス・ミレシウスについての小論、恋の歌の添えられたアレティーノの対話編〔『ナンナとアントニアの話』〕などは、その挿絵などの絵やその他の淫靡なものともども、必ずや男たちの欲望に火をつける。「恋の小話、物語、対話を聞いたり読んだりするほど強力な武器はなく、多くの者がこれですっかり狂気に陥る」と、ある人物〔エネア・シルヴィオ〈・ピッコローミニ〕〕は言う。トラキアのアブデラ（そこでエウリピデスの悲劇の一つ『アンドロメダ』が演じられた）で、観客は舞台上の人物、そして何よりペルセウスの「おお、クピド、神々と人々の王……」の情を誘うセリフにたいそう心動かされて、この完璧なイアンブス詩の言葉のあとしばらくは、みな「おお、クピド、神々と人々の王」を叫び続けたものだった（ルキアノス『歴史は如何に語られるべきか』1.）。新しい歌が発表されると大人も子どもも徒弟もこぞって街に繰り出し歌い続けるように、『アンドロメダ』の観客たちは、かのペルセウスの悲劇的な役を演じ続け、誰の口にも「おお、クピド」、どの通りにも「おお、クピド」、ほとんどどの家にも「おお、クピド、神々と人々の王」、舞台役者のように朗読し続けて「おお、クピド」、皆があまりにこの狂気に取り憑かれ、あの情感あふれた愛の科白を心に抱いていたために、その後長きにわたって忘れることも、心から追いつくことができず、「おお、クピド、神々と人々



の王」はずっと人々の口にあった。こういったことからアリストテレスは若者に芝居を見たり恋愛物語を聞いたりするのを禁じている（『政治学』第7巻第18章）。

ゆえに、軽薄な若者たちも娘たちもこれらを益なしと  
考えるべし——

[マルティアリス『エピグラム集』第4巻〈正しくは3.69.5-6.〉]

若い人たちには、こういったことに手を出させたくない。そのためローマ人たちはウェヌスの神殿を、ウィトルウィウスが「若者たちが愛の愉悅に慣れてしまわぬよう、城壁の外に」〔『建築論』第1巻第7章〈1.〉〕と言っているように、愛欲のあらゆる対象や機会を避けるためにと、郊外に設けた。なぜなら、そういった事が為さぬことなどあろうはずなどないのだから。イズメネオスがソステネスの園を散歩していた時、そのとき恋をしていたのであるが、『テティスの結婚』や、その他私の知らない多くの淫らな絵画を眼にしてほとんど恍惚に達してしまった〔エウスタティオス〈『恋するイズメネとイズメネオス』〉第1〈おそらく2〉巻〕。本当のことを言えば、淫らなものに触れ、他人の愛の戯れや口づけや踊りを見て、心の動かない者などいない。それどころか、彼自身役者になればどうなのだろう。

口づけを交わすことは、その外の卑猥な刺激にもまして、歌のリフレインのごとくで、とても強力な砲台、クセノポンは蜘蛛の毒のように感染力が強いと考えている〈『ソクラテスの思い出』1.3.12-13.〉。大いなる誘惑、火そのもの、燃える欲情の序文というか序論、アプレイウスは、欲情そのものだと付け加えている〈『変身物語』2.15.〉。

ウェヌスはネクタルの精髓に浸す。

[ホラティウス〈『オード集』1.13,15-16.〉]

大将も、指揮部隊も、征服する強力な攻撃、

(君は武器で馴らすが、接吻で馴らされる)

[ヘインス〈『イアンブス詩集』「姫遊び」1.11.〉]

アレティーノでのルクレティアが求愛者を優しさで征服し、彼に欲望を抱いたとき、「彼の首筋をかき抱き、何度も何度も接吻した」〈『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉。その結果、瞬時にして、彼に自ら進んで跪かせたが、他の仕方ではこの結果はなかったであろう。しかも接吻は止むことのない攻撃、

——それは消えることなく、いつも始まる、

[ペトロニウス 〈『不完全詩格詩集』 101. 10.〉]

いつも新たで、すぐにも最初に戻って始まる [カトゥルス 〈『詩集』〉 『レスビアへ』 〈5. 7.〉]。口づけは決して終わることなく、いつもまっさら、そして火のごとく触れてくる。

——身体に触れるだけをやってみろ、  
たちまち君の四肢は蜜とろかす熱で融け流れるだろう。

[ペトロニウス 〈『サテュリコン』 126.〉]

特に淫靡に口づけられれば、アプレイウスが感じ入って言っているように、「フォティスは、腕を絡めて、ぴたっと押し付けて口づけ」[『変身物語』 第10巻 〈正しくは2. 16.〉]、「唇をすぼめて押し当てた」[ペトロニウス 〈『サテュリコン』〉]。

押し付けてくる甘美な口づけで。  
半開きの甘い唇で  
わが麗しの人に口づければ、  
病み傷ついた魂が、  
わが唇へと突進す。

[アプレイウス 『変身物語』]

魂も何もかもが揺す振られる。「そのとき、たくさんの接吻で唇が音を発し、同時に魂を混ぜ合わせ、互いの抱擁のうちにも魂を放出する」[ペトロニウス 〈『サテュリコン』 132.〉]。

我々は熱く、互いを抱きしめ  
さまよう魂を、こちらの唇からあちらの唇に  
移した。気がかりよ、さらば。

[ペトロニウス 〈『サテュリコン』 79.〉]

彼らは自らの魂とスピリトゥスを接吻によって一緒に吐き出し、バルダッサーレ・カスティリオーネ 〈『宮廷人』 4.〉が述べているように、「彼らが接吻をすると、心とスピリトゥスを交換し、情愛を混じり合わせ、それは肉体というよりも、むしろ精神の結合である」。そして、これらの接吻は喜ばしく、心地よく、アンブロシアのような接吻であるが、

軽い接吻は甘いアンブロシアよりも甘い。

[カトゥルス 〈『詩集』 99. 2.〉]

それらの接吻はガニユメデスがユピテルに与えた接吻のように、「ネクタルよりも甘く」[ルキアノス〈『著作集』〉第4巻〈『神々の対話』5.〉]、バルサ、そして、ネクタルと蜂蜜よりも甘い[セクンドゥス『接吻』4.〈1-4.〉]、「純粋な愛を滴らせる接吻」[エウスタティオス〈『恋するイズメネとイズメネオス』〉第4巻]のようなものである。というのは、

撫子も薔薇も、恋人たちが見つめ合うときの  
このうえなく甘い接吻ほど甘いことはないからだ。

しかし、接吻はアロエや胆汁のように厄介な印象を残すこともある。

私には、あの接吻はアンブロシアから、  
不快なクリスマスローズよりも不快なものに変わった。

[カトゥルス〈『詩集』99.13-14.〉]

それらは人を惑わす接吻である。

なぜ、あなたは私を柔らかい腕で包むのか。  
なぜ、あなたは偽りの接吻で誘惑するのか。

[ブキャナン〈『十一音節詩集』4.24-25.〉]

それらは破壊的であり、多ければ多いほど、より悪くなる。

彼女は、千の接吻を与えて、私を破滅させた。

[オウイディウス『恋愛術』第18歌〈正しくは『恋の歌』〈2.18.10.〉]

それらは惨めな恋人たちにとって生命取りである。誠実な接吻、慈愛の接吻、友愛の接吻、控えめな接吻、ウェスタの巫女の接吻、公的で祭儀的な接吻、などが存在することを、私は否定するわけではない。接吻の感覚、両腕の抱擁は、人間に対する自然からの固有の贈り物である。しかし、また淫らな接吻も存在する。

そして彼女は、その両腕を私の首の周りに巻きつけた。

[オウイディウス〈『恋の歌』2.18.9.〉]

あまりに長く、あまりに激しく、「彼らは鳶のように抱き合い、貝のように締めつけ合い」[リブ

シウス『古代選集の註解』3.1.]〈トレベッリウス・ポッリオ『ガッリエヌスの将軍』2.8.〉、鳩のように口を摺り合わせ、淫らに口づけし、唇を噛み、さらに加えて、(ルキアノス〈『著作集』第4巻『娼婦の対話』3.「ピリンナと母親」〉が述べるように)「口を強く押しつけたために、唇はほとんど離れることができず」、「口づけをして噛みながら、また口を開いて胸を愛撫する、等々」。このような接吻を彼女はギュトンに与えた。「抵抗しえない少年のうなじを無理やり捉えて、彼に無数の接吻を与えた、等々」〈ペトロニウス『サテュリコン』20.〉。それは接吻以上の、あるいはあまりに親密な接吻であり、彼〔アプレイウス『変身物語』6.(8.)〕が語っているようなもので、「ウェヌス自身から7つの甘美な接吻を受け、等々」、軽薄な恋人たちがおこなう、他のおぞましくも忌まわしい卑猥なことを伴っている。もし、ペドロ・デ・レデスマが述べているように、結婚後に夫が妻に与える接吻が「致命的な罪」ならば、あるいは、ヒエロニムス〔『ヨウイアヌス駁論』第1巻第30章〈正しくは49章〉〕が述べているように、「自分の妻をあまりに強く愛する者はすべて姦淫者である」ならば、あるいはトマス・アクィナスが『神学大全』第2-2部、問題154、第4項で述べているように、「触れることも口づけすることも致命的罪である」ならば、あるいは、ギヨーム・デュランが『聖務規則』第1巻第10章で述べているように、「婚約者たちは、結婚式が禁じられている間は抱擁を慎まなければならない」ならば、上述のような淫らな接吻や卑猥な行為について、情欲そのものではないとしても、獸的情欲の前兆については何が生じるであろうか。しばしば自らの妻を蹂躪する者たちについては何が生じるであろうか。しかし、これに私は何の関係があるだろうか。

私が目論むのは、あなた方にこの燃え立つ情欲の成り行きを示すことである。したがって、私がこれまで述べてきたことすべてを、優雅なムサイオスのよく知られた例によって要約することである。私とともに、レアンドロスとヘロの愛情の推移を観察するがよからう。彼らは最初に、互いを淫らな視線で見ることから始める。

それから、彼は横目で、頷きながら見つめ——  
無言で頷きながら、少女の心を惑わせる。  
そして、彼女はそれに対して、頷き返し、若き  
レアンドロスの愛を拒むことはなかった……。

続いて

彼は闇にまぎれて、黙って歩み、少女の  
薔薇色の指に自分の指を絡ませ、深々と  
溜息をついた——

続いて

彼はよき匂いをさせて、乙女のうなじに口づけし、  
愛の刺激に打たれて、このような言葉を漏らした。  
私の願いを聞いてください、私の愛を憐れんでください、……  
こう言って、彼は、抗う少女の心を説き伏せた。

〈ムサイオス『ヘロとレアンドロス』101-19.より〉

同じ推移はアポロニオスの『アルゴナウティカ』において、イアソンとメディアの間で、エウスタティオスの恋するイズメネとイズメネオスの10巻本の中で、アキレウス・タティオスのクレイトポンとレウキッペの間で、チョーサのトロイラスとクリセイデについての上品な詩において、そして、ペトロニウス『サテュリコン』111-12.の戦士とエペソスの貴婦人についての注目すべき物語の中で優雅に描写されている。この貴婦人はその貞淑ゆえにアジア中でたいへん有名で、彼女の夫を悼んでいた。その戦士は恋人たちにとっては常であるような巧言によって彼女に言い寄った。——「あなたは心に適う愛と戦うつもりですか」〈ウエルギリウス『アエネイス』4.38.〉等々。最後に、「彼女は自らの決意が破られると感じた」。彼は彼女の善意を受けとり、自らの情欲を満足させるだけでなく、彼女の夫の死体を、彼が見張っていた十字架上に、つい先ごろ盗まれた泥棒の死体の代わりに吊るす一方で、彼女のいた地下墓室で彼女に言い寄った。これをあなた方は物語と言うだろう。しかし、それはきわめて重要な教訓を有しており、愛に溺れた恋人たちの通例の推移を巧みに表わしている。

このような誘惑は多く存在し、すなわち、頷き、戯れ、目配せ、微笑み、諍い、印、好意、象徴、文字、ヴァレンタインの贈り物、等々である。おそらく、この理由のゆえに、ゴドフロワは『愛についての対話』第2巻〈6.〉において、女性たちに書くことを学ばせなかったのだろう。彼女たちが眼前に現われたとき、このように多くの挑発が用いられる。彼女たちは欲するときもあり、また欲さないときもある〔テレンティウス『宦官』第4幕第7場〕。

気ままな少女のガラテアは僕に林檎を投げつけて、  
柳の森に逃げて行くが、その前に自分が見てもらいたい。

〈ウエルギリウス『牧歌』3.64-65.〉

ヒアロウはレアンダから不機嫌を装って逃げ去った。

しかし、彼女は去りながら、きわめて頻繁に背後を見た。  
そして、途中で留まるために、多くの貧弱な言い訳  
を見いだした。

〔マーロウ〈『ヒアロウとレアンダ』2.5-7.〉〕

しかし、もし彼がたまたま彼女に追いつくならば、彼女はとても嫌がりながら、従順で内気になる。

彼女は拒絶し、抗うが、何よりも打ち負かされることを欲する。

〈バティスタ・マントヴァーノ『牧歌』4. 218.〉

彼女は打ち負かされないように見えるが、ついには打ち負かされる。

このような戦闘において、女性たちは自らの力の半分しか用いない。

〈マーロウ『ヒアロウとレアンダ』2. 295-96.〉

時折、彼女たちは身をさらし、きわめて柔順で、素直で、温順で、おとなしく、進んで抱擁され、草の上に押し倒され、テオクリトスの『牧歌』第27番の女羊飼いとともに、自らの上衣を置いてなどして、それなりの年齢になると、そしてさらに年齢を重ねるまでは、遊び、戯れ、また自分の得策を秘かに探るような遊び方をする。それから彼女たちは、内気になって、再び無口になり、たいそう選り好みをし、たいそう無愛想で、たいそう遠慮がちになり、その結果、彼女の好意を得て、彼女の愛を勝ち取るよりも、仔馬を飼い慣らし、暴れ馬を捕まえて乗りこなすことの方が容易になるだろう。彼女たちは王国に対して、目配せも、微笑みも、接吻もしない。アレティーノ〔『ナンナとアレティーナの話』〕バルト訳『ポルノディダスカルス』のルクレティアは、彼女自身の物語で述べているように、この種のことで卓越した遣り手だった。「私は本性によって、また手管によってきわめて美しく、麗しかったけれども、これらの策略によって、実際の私よりもはるかに愛らしいように見えた。というのは、男たちが熱心に追い求め、しかも獲得することができないものが、もっとも激しい欲望を伴って、彼らの情愛を惹きよせるからである」。(彼女が述べるには) 私は一人の求婚者にことのほか愛されていた。そして、彼が私に贈り物をすればするほど、彼が私に熱心に言い寄れば言い寄るほど、私は彼を拒み、蔑んでいるふりをし、私は他の者たちにはいつも許しているのに、彼には私を見ることも、私と話すことも、私に接吻することも許さなかった。さらに彼を騙し、そして呼び出すために(彼だけを、私は目当てにしていたので)、私は自分自身の召使いに、あるスペインの伯爵から遣わされた者を演じさせた。彼は私の仲間の一人だったのだが、あたかも伯爵の従者のように、きわめて見事にその役を演じた。「私の主人であり師であるコメス・デ・モンテ・トゥルコが、貴方に小さな贈り物と狩猟の成果である鹿、雉、鶉などを少々送られました(すべては彼女が自前で買ったものだったが)。主人は、貴方への愛と奉仕が認められ、それが喜んで受け取られることを望んでおります。そして主人は、間もなく、貴方の奥方に会いに来るつもりです」。これらすべてとともに、彼女は彼に、指輪、手袋、スカーフ、宝冠——これらは他の者たちが彼女に送ったものである——を見せたが、それは、彼をただ罠にかけるための方策であった。(彼女が結論しているように) これらの手段によって、「私が哀れな紳士を狂気へと陥らせたあまり、彼はすぐにも自分の身を滅ぼし、私の

ために彼の貴い血を流そうとしていた」〈以上アレティーノ『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉。ルキアノス〔『著作集』〕第4巻『娼婦の対話』3.〕のピリンナは、彼女の話から明らかであるように、随分と前にこのことを実行していた。というのは、彼の愛人のディフィルスが彼女に会いにやってくる（それが彼の毎日の習慣だった）、彼女は彼に対して眉をひそめ、彼女の友として認めようとせず、彼の好敵手であったランピリアスに、まさに彼の面前で接吻したのは、なぜだったのだろうか。（彼女が自分を叱った母親に言ったことには、）彼にもっと嫉妬心を抱かせ、彼の愛を誘い、ますます欲情を掻き立て、彼女の好意は簡単には得られないと知らしめるためなのであった。目論んだ目的のために、彼と仲たがいしたり、彼を怒らせたり、何もないのに揉めたりしようと、これ以外にも、彼女は多くの手練手管を使った（と同書で彼女は言っている）が、それも、もう一度仲直りすることが目的であった。「恋人たちの怒りは恋の和解」〈テレンティウス『アンドロス島の女』555.〕とは古くからの諺にもあるとおり。またアリスタエネトスは「恋人たちの喜びは、壊れたのちにこそ、いや増した喜びとなる」〈『恋愛書簡』2. 14.〕と述べているが、雲が晴れたのちにこそ太陽の光がありがたく思われるのと同じである。この金言はきわめて真である。前述のルキアノスにおいてアンペリスがクリュシスに言うように「もし、嫉妬せず、怒らず、癩癩おこさず、争わず、溜息もつかず、誓いもしないなら、そんな男は恋をしちゃあいない」のであるから。接吻する、抱擁する、首に絡みつく、愛を断言する、誓う、願う、などは当たり前の症状、「そこから始まり増えていく愛の印」。でも、もし、嫉妬し、怒り、過ちを犯し、などするなら、あんたは期待しても良い、お前さんよ、奴はあんたのものだ。でも、もし、あんたが奴を独り恋敵もいないままにして、巧くあしらい、悦ばせ、あんたを独り占めにしたと思わせたら、奴の恋心は間違いなく萎み、あんたにそれほど心を向けなくなるさね。ここまでは経験から言える、と彼女は言う。裕福なデモパンテスはあたしに求愛したけど、あたしは拒否する素振りを見せ、あいつの面前で絵描きのカリアデスを色よくもてなしてやった。最初、あいつは何か口走りながらを追ってきた、ずっと苛立って罵ったり誓ったりしながらね。でもとうとう折れて、あたしをぞっこん愛していて、自分のもってるものをすべてあたしに差し出すと誓い断言し、あたしのために死ぬとまで言ったんだよ。だからあたしはあんた（可愛いクリュシスよ）とすべての娘たちに忠告するのだが、求愛者たちをあんまり優しく扱いきぬようにね、それを感じたら傲慢になるからさ。ときどきは拒否し、離れるように、一旦あたしの言葉を聞くならもう一度撥ねつけ、何度かは戸口から中に入れず、従者として踊らせておくよう、あたしの言うとおりにしてみな、そしたら、奴を狂わせ、完全撤退させ、どんな条件にも従って、あんたの望むことを何でもするようにさせることができるんだよ〈以上『娼婦の対話』8「アンペリスとクリュシス」〉。これぐらいはまだ普通のやり方で、今述べたルキアノス〈『娼婦の対話』4「メリッサとバックス」〉でのメリッサはこれ以上の術策を使ったようである。というのも、彼女の求愛者が冷静にやってきたとき、その心を掻き立てるために、「メリッサはヘルモティモスを愛し、ヘルモティモスはメリッサを愛している」と、1枚の紙に彼のライヴァルの一人と自分の名前を書き、柱に打ち付けて誰もが見えるようにしたり、彼が良く通る道に落としておい

たりした。愚かな恋愛初心者その男がそれを見て、たちまち読んだとおりに堅く信じ込み、私のところにやってきて喚きたてるなどした。「そこで私は彼の愛に失望したが、4か月後もう一度受け容れた」。エウゲニアはティモクレスを恋人と考え、それ以来長い間彼の名を胸に抱いていた。ミュソンの結婚式で、初めて彼を見かけたというだけの理由で、カミナはパンピュロスやダンスの相手に選んだという。フェリキアノスは公道でカエリアに追いつき、手を貸すことを申し出た。そうしていっそう親しくなり、そこから愛し合うようになった。しかし、彼らのやり方を半分も巧くこなせる者はいない。アレティーノはどんなことを経験したか、ルキアノスは何を考案したのか、また奔放なアリストエネトスはどうか。みな同じものを拒否し受け取る、かたくなに拒絶し熱心に求める、いっそう熱く来れば断る、後を追えば逃げる、が、嫌えばまた影のように後を追ってくる、逃げる者を追い、追う者から逃げる。呼び戻そうと身を退き、優しく厭い、微笑みながら脅し、愛らしく心地よくつむじを曲げて、彼らは君を困らせ、何千回も手を変えて誘惑するのである。彼〔ペトロニウス〕が言うように、

容姿では充分ではなく、美しく見られたい女性は、  
 平凡な仕方で満足すべきではない。  
 言葉、機知、会話、親切、笑みが  
 より単純な自然の造作に優るのだ。

[[『不完全詩格詩集』〈20. 1-4.〉]

そういうわけで、ピロストラトスも同様に『絵画論』(1. 6.)〔〈カルターリ〉』神像論』327 葉に引用で、さまざまな愛を描いている。「ある者は若者の、ある者はまた別の年代の、ある者は老人の、ある者は翼あるものの、ある者は同性の、ある者はまた別の、ある者は松明を持ち、ある者は金の林檎を持ち、ある者は投げ矢、酒、罌、輪罌やその他の道具を手にして」という風に。それはプロペルティウスが『詩集』第2巻29で、美しくも描いたのと同じである。さらにはある人が解釈しているような、さまざまな誘惑や恋する者たちのさまざまな感情、それらは単独ではそうでもなくとも、合わさると、いかに強靱な体質すら打ちのめしてしまうのである。

悪名高い二人の教会迫害者、デキウスとワレリアヌスについて、(ヒエロニムスが『書簡集』第3巻「パウロの隠修人生」で) 記録に残しているのだが) 若いキリスト教徒に自分たちの偶像に決して捧げものをすることなきよう強要するに際して、彼らは、拷問も約束も使わず、彼を試すのに他の方法を取った。彼らはそのキリスト教徒を美しい庭園に連れて行き、彼と戯れるべく愛妾をあてがった、「彼女は彼の首に腕を回し口づけた、そして言葉で口にはできないことを手で施すなどし」、使いうるあらゆる誘惑をしかけた、すなわち拷問では攻略できない人をも、愛は攻略、包囲できることもあるのである。しかし彼の節操は極めて堅かったゆえ愛妾は彼を攻略できなかった。この最後の武器が功を奏さなかったため、彼らはそのキリスト教徒を自由に解放した。グロスタシアのパークリには、かつて尼僧院があった(と、400年以上も生きた老歴史編



纂家ウォルタ・マップが言う)。「そこには気高く美しい尼僧院長がいた。かの狡猾なケント伯ゴドウィンが、そのあたりを旅していて、(彼女をではなく彼女のもとの尼僧たちを狙って)自分が再び戻ってくるまでと、まことに優男の若者の甥を(病らしいと装わせて)尼僧院長のもとに残す。彼には、ゴドウィンが尼僧院長の、そしてさらにできる限り多くの尼僧たちの、花を散らすまで病を装うようにと命じ、尼僧たちが甥のもとにやってきたときにいつでも贈れるようにと、指輪や宝石、帯、その他の小間物を残した。若者はその仕事を喜んで引き受け、役割をとて巧くこなしたので、短期間に彼女たちの腹の上に乗れ、それをやりおとしたときに、いかに巧くやりつくしたかを伯爵に話した。伯爵はすぐに法廷に赴き、王に、しかじかの尼僧院がいかに娼館になってしまったかを話し、視察を入れ、尼僧たちを放逐させ、その土地を自分の使用にと依頼する」[カムデン『ブリタニア』]。ゆえに、この類の誘惑が時宜を得て使われたなら、いかに強力で、こういった魅力を毛嫌いする非常に神聖なる人でも抗うことがいかに困難かをあなた方が解るように、もう一つ話を繰り返しておこう。ジョージ・メイジャ〈正しくはゲオルグ・マイエル〉は、テオドシウス時代にいた修道士ヨハネの伝記において、隠修士は独身を貫き、きわめて簡素な生を送るべきであったと勧めている。だが、ある夜、たまたま悪魔が、道に迷った若い物売り娘の格好で彼の庵を訪れ、一夜の宿を乞うた。「老人は彼女を招き入れ、よくあるように彼女の不幸話の相談に乗ったが、その後、彼女は煽情的な言葉や仕草で彼を誘惑し始め、髭をもてあそんだり、接吻したり、もっと良くないことをしたりして、最後には彼を籠絡した。彼が事に及ぼうとしたとき、突然彼女は消え、悪魔が空中で彼を嘲って笑った」(『師父たちの生涯』)。これが本当の話か作り話かなどと議論するつもりはない。私が前に言ったことの例証になっているのであるから。

しかし、そうであったからといって、今まで私が語ったものや、その類いの誘惑の餌では不十分で、他にも多くのものがあり、それらも、それら自体で、燃えあがる肉欲の激情をおこすが、なかでも、他に追従を許さないのが舞踏である。舞踏はそういった力を持った武器で、外すわけにはいかない。ペトラルカが「欲情の誘惑」(『順逆両境への対処法』1. 24.)と呼ぶ欲情への拍車、「その〔舞踏〕輪の中心には悪魔がいる」のである。「それを使う多くの女性たちは、貞節を失い、出たときとはすっかり違い、ただひどい状態になって家に帰る」。また、この誘惑を「あらゆる卑猥な快楽と誘惑の道連れ、それによっていかなる不都合、下品な会話、猥褻な行為が生じるか簡単には言えない」と言う者もいるが、幾度も、そのような異様な仕草、淫らな身のこなし、卑猥な物言い、淫靡な接吻、優し気な抱擁が訪れ、

—— (ガーティスの女性が、音楽にのせた  
踊りで刺激し始め、拍手喝采を受けた  
娘たちがお尻を振り振り地面へと降ろしていく、  
それが、萎えかけた欲情もかきたてるものとなる) ——

[ユウエナリス『諷刺詩集』11. (162-64, 67.)]

これは踊りを観ている者たちの正気を奪ってしまうのである。トゥログスの伝記の梗概を書いた著者〔ユスティヌス〕が、プトレマイオス王の反乱を十分に描き、詳述したとき、彼を打倒する主たる武器や道具として、奏でるタンバリンと踊る三拍子の舞踏を付け加えた。「王は観る者であったのみならず、自ら踊る主たる演者でもあった」〔『ポンペイウス・トログス「ピリッポス伝」梗概』第30巻〕。しかし、よく使われ、良家の娘の養育の一部をなすのは、主の祈りや十戒を言えるようになる前に、リュートやその他の楽器に合わせて歌い、踊り、演じることを身につけることである。次に両親が考えることは、娘たちが婿を見つけることで、彼女たちは「まだ爪も柔らかいままに不純な愛を心に描いてしまう」〔ホラティウス『オード集』第5巻〈正しくは第3巻6.23-24〉〕。舞踏は大いなる誘惑ゆえにしばしば用いられ、これによって多くの男たちが降参する。ルキアノスでもタイスは舞踏でランプリアスを籠絡した〈正しくは籠絡されたのはデフィルス、『娼婦の対話』3〕。ヘロディアスはヘロデをことのほか悦ばせ、なんでも望むものを与えると誓わせ、皿に載せた洗礼者ヨハネの首を求めた。ノルマンディ公ロベールは、馬でファレーズに赴いたとき、美しい娘アルレットが草地の上で踊っているのを見染め、この娘にぞっこん惚れこみ、その夜彼女と寝ずにはいられなかった〔〈ジョン・ヘイワード『第三期ノルマン朝、イングランド王伝』〕。オウエン・テューダは舞踏で王妃キャサリンの愛情を得、彼女に膝枕をしてもらうに至った〈ドレイトン「イングランド英雄的書簡集」「オウエン・テューダから王妃キャサリンへ」55-62〕。誰もが自分の経験に似たような話を見出すであろう。かのギリシアのアリスタエネトスの『恋愛書簡』〈1.〉26〕では、高貴な優男スペイシッポスが、美しい若い女性パナレタが踊っているのをたまたま見かけ、いたく恋したあまり、その後長い間彼女のこと以外何も考えられなかった。彼はパナレタの名を叫び続けながら家に帰った。「私みたいに、あの娘が踊っているのを見て讚嘆しない奴なんているのか。あの娘を愛しない奴なんているのか。ああ、素晴らしいパナレタ、神々しいパナレタよ。私は新旧ローマを、多くの美しい町々を、多くの行儀よき女性たちを見てきたが、パナレタのような女性は見たことがない。ほかの女性はパナレタに比べればみんな滓で、むさくるしい。なんて優雅に彼女は踊ったことか、ステップを踏んだことか、ターンしたことか、彼女を愉しめる男は幸せ。類稀な、唯一無二のパナレタよ」。クセノボンが『饗宴』〈9.2-7〉で、愛について語り、考案できる限りのあらゆる武器を使ったとき、ソクラテスを動かし、誰にもまして彼を刺激しようと、ディオニュシオスとアリアドネのダンスといった心愉しませる幕間出し物以外すべてをやめた。「最初にアリアドネが花嫁の衣装で現われてその役を演じ、ディオニュシオスが、音楽に合わせて一步一步と歩を進めて入ってきた。観客はみな、その若者の身のこなしを讚嘆し、アリアドネ自身もその光景にいたく心惹かれたゆえに座することも忘れていた。やがてアリアドネを見たディオニュシオスにも愛の火がついた。彼女の膝にまで身をかがめ、まず抱擁し、優雅に接吻した。舞踏の相手を乞われて、彼女も抱擁し返し、同じ情熱をこめて接吻するなどした。傍に立って見ていた者たちは、囁し立て踊るようにと勧めた。そしてディオニュシオスが立ち上がるときにアリアドネをも立ち上がらせ、抱擁、接吻、その他愛を

いや増す優雅な仕草が二人の間に交わされた。周りの者がそれを眼にしたとき、美形のディオニュシオスと美女のアリアドネはとても甘美に真摯に接吻し、しっかりと抱き合い、本当に愛していると誓い合い、互いに対してとても燃えたので、見ている者たちも、まるで地から飛び立ってしまったかのごとく舞い上がったのだった。最後に二人がとても心を込めて抱き合って動きを止め、まさに花嫁の閨に行こうとするのを見ると、彼らはいそいそ心唆され、未婚の者はすぐにも結婚しようと心に誓い、既婚の者はすぐに馬を呼び寄せ妻の許へと駆け戻った」。この燃える情欲以上に大きな動機がありえようか。なんという強敵なのだろうか。それゆえ非常に多くの高位執政官たちが非難し、非常に多くの教父たちが憎悪し、非常に多くの厳格な人たちが反論するのも故なきことではない。「手練手管に絡めとられることなきよう、歌手や踊り子であるような女性と付き合ったり、その言葉に耳を傾けたりするなかれ」と『シラ書（集会の書）』（9. 4）では言っている。ピエトロ・カプレットは「円形劇場では欲情は見られるというより学ばれる」[『愛の蔑視』第4巻（正しくは第2巻序）]と考える。（自ら語っているように）雄弁な神学者であったナジアンゾスのグレゴリオスは、彼の気高い友人が娘オリンピアの結婚式に、他の司教たちと共に彼を真面目な気持ちで招いたとき、行くのを拒んだ。「痛風もちの老司祭が踊り子たちに混じって座っているのを眼にするのは馬鹿げたことだから」[『書簡集』57「アニュシオスへ〈プロコピウスへ〉」、演じる側に回るよりはましとはいえ、観客の中にいることは不都合だと、彼は考えたのである。「真面目な者は舞踏したりはしない」〈『ムレナ弁護』6. 13〉とケケロは書いている。同じような理由で、ドミティアヌスはローマ元老院議員に舞踏を禁じ、そのことで、多くの議員を元老院から追放した〈スエトニウス『ローマ皇帝伝』「ドミティアヌス」8. 3〉。しかし、それは煽情的な舞踏と異教の舞踏であり、そのような不都合を生じるのは誤った舞踏の仕方だと言う読者もいるだろう。ゆえに私は、「この世の人間のものであるもっとも楽しく善きものを」（トルキアノスが〈『舞踏について』1. で〉称しているものを）、巧みに咎め非難することも、「無邪気に責め立てることも」できない。あなたは誤解している。私は舞踏を非難しているのではない。それでも私は、舞踏を、時宜を得て適度に真面目になされたなら、正当な慰みで合法的な愉しみと考えていて、「ただ愉しみとして、誠実な慰みや身体的運動を重んじる舞踏は否定されたり非難されたりすべきではない」というプルタルコスと同意見である。「それは心を弾ませ、身体を鍛え、観る者を愉しませ、端正な身のこなしを教え、耳にも眼にも魂そのものにも同じく作用する優美なもの」というトルキアノス〈『舞踏について』72〉にも賛同する。サルスティウスは「センプロニア」〈『カティリナ戦記』25. 2〉における歌唱と舞踏を非難している。彼女が歌ったり踊ったりしたからというのではなく、巧く歌いすぎ踊りすぎたからというのであり、それは歌や舞踏の誤った使い方だということである。グレゴリウスが舞踏を否定しているのは、単に非難しているのではなく、ある種の人たちに関して否定しているのである。男女が一緒に舞踏することを拒んでいる者は多いが、それは舞踏が情欲を掻き立てるからである。彼らは、リュクルゴスやマホメットと意見を同じくし、ワインは男たちによっては泥酔させるので、葡萄をすべて切り倒し、一切の飲酒を禁じた。

害をなすことなきものは、また益をなすこともなし、  
火ほど役に立つものがあるか——

〔オウィディウス 〈『悲しみの歌』 2. 266-67.〕〕

他のすべての正しき娯楽についてと同じように、この舞踏について言うのであるが、このような娯楽は火のようなもので良きものも悪しきものもあるが、舞踏ほど不都合なものを見たことがない、たとえ相応しい人が適切な時におこなったとしても。またヴォルフガング・ハイダや当代の神学者と同じく「もし、正しく、真面目で、慎み深く、立派な男や誠実な女の光に満ちているなら、その人は認められうるし、認められるべきである」〔『道徳哲学体系』〈第2部〉〕と、私も結論する。「喪に服すべき時あり、踊るべき時あり」（『集会の書』 3. 4.）、そのときには、楽しみに興ぜしめよ。そして彼〔アプレイウス〕がかつて言ったように「若さの絶頂期にある若者や娘が、見た目も美しく、身なりも良く、優雅な身のこなしでギリシア風ガイアールを踊り、舞踏を乞われれば、リズムよくステップを踏み、回転し、進み、ときに離れ、ときに一緒に、ときに整然と、ときに跳ねて踊る」〔〈『変身物語』〉第10巻〈29.〉〕。そんな風に美しく結び、ほどけて流れるのは心優しい光景である。太陽と月は地球の周りを、それより上の三つの惑星は太陽の周りを、止まったり巡行したり逆行したり、遠地点にいたり近地点にいたり、速度も速くなったり遅くなったり、西へ東へと舞踏している（という人もいる）。星々は回転し、跳ね、進むのである。金星や水星は、ブルボン惑星とも呼ばれる三十三の太陽の斑点とともに、太陽の周りを廻り、フロモンはそれらが「キタラを奏で歌う太陽の周りを踊りながら」〔『アリストアルコス反駁』〕と言う。四つのメディチ星は木星の周りを、二つのオーストリア星は土星の周りをなど、他の同じような星々も天球の音楽に調和して廻っている。ダビデが箱舟の前で（『サムエル記下』 6. 14.）、またミリアムが（『出エジプト記』 15. 20.、『ユディト書』 15. 13.）踊ったように、（おそらく悪魔がこれらの酒飲みを連れ込んだのであろうが）わが国の立派な上級外交官、真面目くさった上院議員でもときには踊るが、それももっともなことではある。クインティリアヌス〔『弁論家の教育』第1巻第11章〈18.〉〕やアエミリウス・プロブス〈正しくはコルネリウス・ネボス〉〔『英雄伝』、「エパメイノンダス伝』〕、ロドヴィコ・チェリオ・リッキエーリ〈『古の教え』 5. 3.〕が詳しく証してきたような、非常に立派な兵士たちはギリシアやローマでいつも舞踏を利用し、非常に立派な執政官たちは歌唱や舞踏を用いた。ルキアノス、マクロビウス、リバニオス〈『舞踏擁護、アリストティデス反論』、プラタルコス、ユリウス・ポッルクス〈『オノマスティコン』〈4. 13-14.〉〕、アテナイオスは舞踏を推奨する公正な論を書いた。当代、それらの国々では、あらゆる国家におけるのと同様、舞踏は大いに必要とされているが、アレクサンドロ・ダレッサンドロが〈『愉快な日々』〉第4巻第10章〈正しくは17章〉、第2巻第25章で詳細に明らかにしたように、未開の人たちのあいだではこれほど大切なものはない。世界中がそれを認めている。

クロイソス王よ、私はあなたの富を蔑むが、あなたの

アジアを、香油、花、純葡萄酒、舞踏ゆえに買う。

[アンゲリアーノ『エロトパイニオン』〈「カエリアへ」5-6.〉]

プラトンは『国家』[実際は『法律』10.〈正しくは6.771E-772A.〉]において、「若者たちが出会い、知り合い、互いに見、見られるように」集団で舞踏をさせ続けるだろう。いや、さらに、若者たちに裸で躍らせましょうとし、それを嘲笑する者を嘲る。しかし、エウセビオス（『福音の準備』第13巻第12章）やテオドレトス（『ギリシア疾病治療法』第9巻）は、そのことゆえにプラトンを激しく非難しているのももっともである。というのも、その一人テオドレトスが言うように、「裸身の局所は、法外で過度な色欲をかきたて、男女を問わず、欲情を燃えあがらせてやまない」〈『ギリシア疾病治療法』〉からである。何事にも中庸というものがある。端的に言えば、これが私の意見である。舞踏は、節度と慎みのあるものならば、そして（我々キリスト教徒の舞踏がそうであるように）時宜を心得ておこなうには、身体にも心にも愉しい娯楽である。もし、かつて異教徒がしたように、淫らな仕方でも誤用したならば、燃える欲情を激しく促すものでしかない。だが、話を先に勧めよう。

もし、これらの誘惑が起こらなかったら、あの愛の戯れの大変な巧者シミエルス [カムデン『エリザベス治世下のイングランドとスペイン年報、1578年』276葉]でも、彼らしい振る舞いを巧くできず、効果的に他者を動かし、欲情を満足させることができないゆえ、人々は誓い、嘘を言い、約束し、断言し、捏造し、偽造し、ほらを吹き、買収し、お世辞を言い、あらゆる様相を装う。これはアレティーノ〈の『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉での、「もし、あなたが愛人をお愉しみになりたいなら、約束なさい、捏造なさい、誓い、偽誓なさい、自慢なさい、装い、嘘をお言いなさい」というルクレティアの助言であった。そうすれば、彼らはダブネに対するアポロンのように巧く事を運ぶことになる。

—— デルポイの地も、

クラロスやテネドスも、パタラの町も、私に従う、

ユピテルは私の父 ——

[オウィディウス『変身物語』1.515-17.]

とても貧しい羊飼いの若者も同じようにするだろう、

谷間にいる雪のように白い仔羊たち、千頭の家畜は私のもの。

[エラスムス『牧歌』。ウェルギリウス『牧歌』〈2.21.〉も参照]

千頭の羊と良い家畜の群れを所有してはいるが、みんな彼女に従う、

—— 私たちはあなたのもの、私たちの調度も  
土地もあなたに従う ——

[リーチ 〈『エピグラム集』 2.71.〉]

家も土地も財産も彼女の意のまま、彼自身がそうであるように。ルキアノス〔〈『著作集』〉第4巻『娼婦の対話』〕での、執政官の息子ディノマコスは身分も財産も彼より下級の娘に恋をした。できるだけ早く欲望を遂げたいものと、彼女に泣きつき、彼女を、彼女だけを愛していると誓い、父親（もうすっかり年老いていたのだが）が亡くなり次第、彼女を娶ると誓った。たまたまその娘の母親はその道に精通していて、まさに老狐で、その手の経験を積んでいたので、娘にこう言ったのだった、今、彼の欲望に身を任せなさい、それ以下のことを考えないように。だって、お前は、彼がこんな貧しい娘のお前のことをずっと好きでいると思うかい。町の美しい娘たちみんなから、良い生まれの娘でも、若いうえに才能に恵まれた娘でも、お前よりできのいい娘でも、もっと美しい娘でも選び放題の彼がだよ。娘は彼を信じてはいなかった。彼女は赤面し、その結果この一件はなかったことになった。ユピテルがユノに初めて言い寄ったとき（ジリオ・ジラルディがテオクリトスの昔の評言に基づいて述べているのだが〈『異教の神々について』第3巻〉）、自分の求愛がより巧くいくようにと郭公に姿を変えた。ある日、ユノが他の女神たちから離れて一人で歩いて来るのを見張っていて、突然嵐を巻き起こしたところ、彼女は恐れて避難できるところに逃げ込んだ。ユピテルも同じように嵐を逃れんと「乙女ユノの膝に飛びこんだが」、ユノは憐れんで彼をエプロンに包み込んだ。ところがユピテルはすぐさま自分の姿に戻り、彼女を抱きしめ、凌辱を働いた。だが、「彼女は母親への恐怖から拒み」、どうしても屈しなかった。「ついに彼は結婚すると約束をし」、彼女は同意したのであった。このことはソルナックスの丘でおこなわれたのであるが、そこは後にコッキュクス＝郭公の丘と呼ばれ、恒久的に記憶をとどめるために、その同じ場所に結婚の女神ユノを祀る神殿が建てられた。それほどに明瞭な約束、誓言、誓約、言明は力あるものであった。こういう場合、年齢を偽るのは通常のこと、再婚したいと思っている寡婦は大抵そうであり、独身男たちもそうすることがある。

その者の齢は、四十歳を  
迎えんとしていた。

[ホラティウス 〈『オード集』 2.4.23-24.]

先に述べたルキアノス〈『娼婦の対話』 11.〉でのカルミデスはピレマティウムに恋をした。彼女は45歳の独身女性であったが、次の9月でたった32歳だと彼には言っていた。この種の偽装はあらゆる面にお馴染みであり、しばしば功を奏する。

信じている娘を騙すのは辛いこと、

[オウィディウス〈『名婦の書簡』2. 63-64.)]

たやすくできて、熟練の技など不要、

まことにこの上なき賞讃とあまたの戦利品を。――

〈ウエルギリウス『アエネイス』4. 93.〉

また、地所を偽るほどよくあるものはないが、それも自分の求愛を推し進め、自分を良く見せるため。若い女性や寡婦や愛する女を惹きつけるために、手あたり次第に大口を叩き、捏造、偽造を重ねるとどまるところを知らず、自分の小姓に、箆笥のマントや細身の剣、手袋、宝石など、さらに緋と金の薄布を巻いた銃尾など、ありもしないものを、取りに行かせてみたりする。そしてペトロニウス〈『サテリコン』102 行〉でしたように、船の船長であったとか、多くの召し使いを抱えていたとか言い立てたり、あるいは自分をより良く騙るために、良き血筋の、良縁を結んだ、名家の士であると装い、衣装を古物商で借りたり、そのときだけ仕える屑物屋というか藪仕立て屋を雇うのに、何の良心の咎めも感じない。大きな財産を所有していると誓ったり、[カトゥルス〈正しくはティブルス〉第1巻第5歌〈60.〉にあるように] 賄賂を使ったりもし、どんなに深く愛しているか、いかなる貴婦人、伯爵妃、侯爵妃、王妃にもまして、どんなに豪華に彼女を飾り続けるかと、虚言を吐き、騙し、強引に偽ったりしてもである。彼らは法服を着、被り物を被って、宝石を身に着け、大型馬車や豪華な馬車に乗り、選りすぐりの食事をする。

鸚鵡の頭、小夜鳴鳥の舌、  
孔雀、そして駝鳥の脳、  
彼らの風呂は撫子の液、  
薔薇、そして堇のエキス、  
一角獣の乳、……

〈ベン・ジョンソン『ヴォルポーネ』3. 7. 202-3, 213-15.〉

喜劇〔『ヴォルポーネ』第3幕第7場〕で老ヴォルポーネがシーリアに求婚したように、少しもそれほど上流の人間でもなく、立派な人間でなどさらさらなく、ただの詐欺師であるが、財を成し、欲望を遂げんがため、あるいは怠惰な時間を過ごすのを好むふりをせんがため、よりよく受け容れられんがため、そしてもっと楽しまんがためにそうしているだけである。結局、彼らの目的はそれだけのことである。

何も怖れず誓い、何も気かけず約束し、  
情欲に燃える心の欲望が満たされるや否や、

いかなる言葉も怖れず、いかなる偽誓も気につけない。

[カトウルス〈『詩集』〉64. 146-48.]

厳かにカエサル守護神にかけて誓おうと、ウェヌスの神殿にかけて、ヒュメンの神性にかけて、ユピテルにかけて、その他の神々にかけて誓おうと、その言葉には何の信用もおけない。というのも、恋人たちが誓い合うときその偽りの誓いをウェヌスは笑っているのだから。ユピテル自身もまた微笑み、赦す〔ティブルス〈正しくは偽ティブルス『ティブルス全集』3. 6. 49-50〕〕、謹厳なプラトンが、あらゆる偽誓について、それが愛にかかわるものである限り神々によって赦されると表明したように〔『ピレボス』〈65C.〉〕、赦すのである。もし、約束、嘘、誓い、断言などが功を奏さなければ、賄賂、証の品、贈り物、その他の芸当が始まる。「ほとんどの愛が黄金に打ち負かされる」〔カトウルス〈正しくはオウイディウス『恋愛術』2. 277-78.〉〕。たとえば、ユピテルは黄金の雨でダナエを穢し、バックスは美しい冠でアリアドネを落とした（この冠は後に天に運ばれ永遠に輝いている〈オウイディウス『変身物語』8. 176、『祭暦』3. 459.〉）ように、彼らはゼッキノ、フローリン、クロン、エンジェル、ありとあらゆる種類の硬貨や铸貨を彼女の膝に降らせる。そうして間違いなく巧くいきそうなことをし、たくさんの宴を催し、ご馳走を供し、招待し、贈り物をし、ありとあらゆる手を尽くすに違いない。カプレットが〔『愛の蔑視』第1巻で〕言うように「この上ない熱意をもって、ご馳走や度重なる贈り物が供される」のである。彼はとても寛大で気前が良く、彼女のみならず、彼女のお供の女性たちにも友達にも知り合いにも、楽器奏者、女術、食客にも、召使いにもと求愛し、そして必ずや誰にも、使者にも運搬人にも配達人にも取り入るが、その誰も報いられることも、重んじられることもないはずである。私には求婚者がいたが（とアレティーノ〔『ナンナとアントニアの話』〕のルクレティアは言う）、その人は私の家に来たとき、まるで糶穀でもあるかのように金銀を撒き散らした。もう一人の求婚者はとても怒りっぽい人であったが、私は巧く扱って、息巻いていたにも拘わらず跪かせた。もし市場に高級なものや珍しいもの、魚、果物、鳥、マスカテルワインとかマルムジーワインとかあらゆる町からの上等な純粋ワインといったものがあつたなら、それはすぐさま私に贈られた。それほど高価でなかったとしても滅多に目にしないもので、それでも私は手に入れた。哀れな男は最後にはあまりに愚かなほどに愛に溺れたので、その顔の眼玉を一つ所望してみたいものだと思った。三人目の求婚者はローマの商人で、その求婚の仕方は、妙なる音楽に高価な宴に詩を添えてというものであつた。私は、ついに「私の処女と引き換えに王国が与えられる」、「私と一夜を共にするのと引き換えに」彼の家も財産も、土地も、彼の所有しているもの全部が私のものになる、と言明し、約束し、誓うまで、彼を寄せつけなかった。私が思うに、彼が巧妙な言いまわしを使ったような、それほどの魔法といおうか強力な呪文を使った魔術師も、彼が私の愛を得るために策略や方策を講じたほどの戦略を、町を攻略するのに用いた軍隊の指揮官もいたためがない。このように男は能動的でもあり受動的でもあり、女もこの点においては引けを取らない。「女性は何に対しても大胆で、愛しめれば毛嫌いもする」〈ヴァルタ編『格言集』1691.〉。



女の半分も大胆に誓ったり  
嘘をついたりできる〈男なんて〉いやしないさ。

[チョーサ 〈『カンタベリ物語』「パースの女房の話」前口上 227-28.〉]

女たちは大口を叩き、騙し、密談するが、せいぜいハンカチを使うならまだまし、手の込んだナイトキャップとか、がま口とか、詩とか、そういったちょっとしたものを使ったりもする。彼[ティブルス 〈偽ティブルス 3. 4. 6.〉] が嘆いているとおりである。

なぜ董を送ってくるのか。まこと私をもっと激しく燃え立たせんがため、  
残虐なあなたは、あなたの董で私の何を犯すのか。

[ジョヴァンニ・ボンターノ]

他のものが何も役に立たなかった場合には、最後の逃げ場は涙である。「涙と溜息混じりのこの話を私は書いた（と私は愛を証言する）」[アリスタエネトス『恋愛書簡』第2巻、第13書簡〈該当箇所なし〉]とケリドニアがピロニオス〈正しくはピロニデス〉に言う。「この稲妻のごとき光は今や涙の川」、燃える炎も涙の川となるのである。アレティーノのルクレティアは、愛する人が町に戻ってきたとき、彼の胸で泣いた、そして「彼はその涙が彼の帰郷の歓びゆえに流されたものと理解するに至った」〈『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ポルノディダスカルス』〉。ペトロニウス〈『サテュリコン』17.〉のクアルティッラは何もその心を動かすことはなかったが、泣き崩れた。そのことをバルダッサレ・カスティリオーネは描いて見せる、「このそら涙につられて彼らは涙にむせび、激しくため息をつき、悲しげな顔つきで蒼白になり、げっそり痩せかけてしまう。もしあなたがただ外国を彷徨っているのであれば、街角ごとにこういった悪魔はいつでも喜んで、ふしだらでだらしない服装で、落ち込んだ表情で、今にもあなたのために死ぬとも言わんばかりの風情で、あなたにまみえる、そんなとき、そんな状況におかれた初心な若者はどんなふうに見えるのか」[〈『宮廷人』第3巻]。しかし、そんなことは信じてはならない。

魂を娘たちなどに委ねてはならぬ、  
女性の誠に比べれば海の方が安全なのだから。

[ペトロニウス 〈『サテュリコン』〉]

女性の誓いや涙、微笑み、約束ゆえに、彼女が自分だけのものと、そして実際にはそんなものはありませんのに、彼女の心も手も愛情も掴んでいると、おそらくあなたは考える。そのことを[〈ロハス〉『セレスティナ』バルト訳〈『ポルノボスコディダスカルス』で]、スペイン人売春宿

の女将は「一人を喜んでベッドに招き、もう一人を門に待たせていて、三人目は家で溜息をついていた」、そして四人目は……、と言った。彼女が眼にし好意をもつ若い男は、誰もが同様に彼女に関心をもち、あなたと同じようにすぐさま彼女を愉しもうとする。一方、既に述べたように、男の方も嘘だらけで、女性たちに誓わせ約束させ、そして嘘をつかせることになる。

あなたに言っていることを、彼らは千人もの娘たちに言っていた。

[オウィディウス〈『恋愛術』3.435.〉]

彼らは一萬一千人の娘から何人かずつを同時に愛し、彼ら一人一人には、彼女だけにぞっこんと信じさせる。あるいは一人の娘を愛するが、それは次の娘を見かけるまでのことで、その後はその娘だけを愛するのである。アプレイウスの第2巻でのミロの妻のように、「誰か美形の若者を眼にしたら、その美しさに打ちのめされ、彼の方に魂を向けてしまう」〈『変身物語』2.5.〉。自分たちが誓うこと、言うこと、為すことを気に留めていないというのが、こういった場合の彼らの讃辞というものである。かと思うとたちまち、互いに蔑ろにし、意を向けず、毒づき、嘲り、だが心ゆしめなければまた狂い、首を吊ったり自分で刺したりして自殺することにもなる。だから、

—— 女性是谁も、誓いを立てる男などを信ぜぬがよい。

〈カトゥルス『詩集』64.143.〉

このような策略や偽りの愛は女性の方によくある。「今日のこの日が私の苦しみと生命を終わらせる。恋人たちを哀れみたまえ」とパエドドラがヒッポリュトスに言う[セネカ〈『ヒッポリュトス(パエドドラ)』670-1.〉]。ルキアノスのヨエッサが若者ピュティアスに、もっと彼の心を動かそうと、もし彼が彼女を受け容れてくれないなら自殺すると心を決めたと言う、「ネメシスがいて、私があなたのために首を吊ったとか入水したとか聞いて、あなたを悲しませ悩ませる以外選べる手がない」[〈『著作集』〉第4巻『娼婦の対話』〈12.「ヨエッサ、ピュティアス、リュシアス」〉]。宣言、誓約、言明や、既に述べたように涙ほど女性に共通のものはない。涙は女性に自由に操れる、というのも、他から見て女性の中で心が壊れて、涙となって出てくるのだろうと思われるように、女性は泣くことができ、女性の眼は、絶えず水を滴らせる岩で、アリストアエネトスが言うように、涙も汗を一日分流しても、適宜、いつでも拭きとられる[『恋愛書簡』第2巻、20.]のだからである。女性は片目で泣いて、片目で笑い、子どものように、泣き笑いを同時にすることもできる〈アレティーノ『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ボルノディダスカルス』〉。

乙女の涙に心動かされぬよう心に留めておけ、

乙女らは、眼に泣くよう教えているのだ。

[オウィディウス〈『愛の治療法』689-90.〉]

泣いている女には、裸足で歩いているガチョウに対するように、多大の憐れみがかけられる。ウェヌスが息子のクピドを失ったとき、彼女は泣き人〈メルクリウス〉を遣わした、彼に出会った人がみな注意を払うようにと〈アプレイウス『変身物語』6.7.〉。

もし、泣いている者を見かけたら、すぐに騙されぬよう、お気をつけなさい。  
それでももし、その者が嘲ったら、むしろお逃げなさい。もし、運命が接吻を  
運んでこようとするなら、逃げなさい。それは罪深き接吻だから。それに  
その唇には毒があるから……

[〈カルターリ〉『神像論』332葉]

カスティリオーネが考えているように、「男と女が互いに騙し合うために使う、この種の誘惑や術策を数え上げるには千年でも足りないだろう」[〈『宮廷人』〉第3巻]。

## 第5項

### 売春宿の女将、媚薬、原因。

ほかのすべての術策が尽きて、もはや自分自身で何もしえないうち、最後の手段は、売春宿の女将、ポン引き、魔法の媚薬、処方箋に飛びこんで、挫折するよりも悪魔自身に頼ることである。

天上の神々をなびかせることができなければ、黄泉のアケロンを動かそう。

〈ウェルギリウス『アエネイス』7.312.〉

そして、もしそれらの間接的な手段によって、多くの人間が打ち負かされ、もし適切な注意が払われなければ、この病気に陥る。というのは、第一に、売春宿の女将はあらゆる場所に、非常に多く存在しており、彼〔ペトロニウス〈『サテュリコン』116.〉〕が古のクロトンについて、「ここではすべての者が誘いこむか、誘いこまれる」と述べているように、我々のほとんどの町について、そこには数多くの公然の、狡猾な売春宿の女将が存在すると言うことができるからである。さらに売春は一つの技芸に、ルキアノス〈偽ルキアノス『恋する者たち』33ff.〉が呼ぶところでは、一つの自由学芸になっている。そして、そこに見られる計略と巧妙さを、多くの乳母、老女、ポン引き、手紙の仲介者、乞食、医者、修道士、聴聞司祭が利用したが、「一本のペンではとても伝えることができない」ほどだろう。ある者が述べるには、

あなたの汚さは、三百行あっても

誰も言い尽くすことはできない。

[プラウトゥス〈『ペルシア人』410-11.〕]

このような秘文字、[トリテミウスの] ステゴノグラフィアやポリグラフィア、大胆な通知、あるいは、彼らの心を告げる磁石を、ちなみにイエズス会士カベオ [『磁気哲学』第4巻第10章] は、架空の偽なるものに数えている。この種の狡猾な伝達から、ユノの嫉妬も、ダナエの防御も、アルゴの警戒も、自らを守ることはできない。最後の一般的な手段は援助者を用いることであり、たとえば、カターニヤのフィリッパはナポリの女王ジョヴァンナを助けた。また、売春宿の助けを [カトゥルス〈正しくはティブルス〉『カルミナ』第1巻5.〈48〉]、それを生業とする老女を用いることである、たとえば、ミルラがキュニラスに惚れて、自らの欲望を達することできなかったとき、彼女の乳母の性悪な老女が苦境に自ら進みでて、こう言う。「おっしゃいなさい。そして、私にあなたの手助けをさせてください。怖がることはありません。このようなことでは、私があなたのために一肌脱ぎましょう」[オウィディウス『変身物語』第10巻〈395-96, 408-9〉]。セレスティナ [バルト訳『ポルノボスコディダスカルス』] が述べたように、「女性によって打ち負かされない女性はいない」。男であれ女であれ、あまりに誠実で、警戒し、内気でなくすれば、確実に、これらの老女のうちの一人が成功するだろう。そして、アウグスティヌス [『隠修士たちの生涯について』第3章「ある修道女へ」] が述べているように、女子修道院の中に孤独な処女を見いだすことはほとんどないだろう。「もし彼女が外出できないとしても、彼女の窓の前に、老女、あるいは噂好きのおしゃべり女が立って、彼女にあれこれと聖職者や修道士について物語り、ある若い紳士や別の紳士のことを描写して、賞讃する」。ある夕べ、私が町の様子を見に通りを歩いているとき（と、ペトロニウス〈『サテュリコン』7.）の一人の男が言う）、「私はある街角で、一人の老女がキャベツと根菜を売っているところを垣間見て（我々の行商人がプラム、林檎、このような果実を売っているように）、お母さん、私がどこに住んでいるか言えますか、と言った。彼女は、私の馬鹿げた洗練さをたいそう喜んで応えた。どうして貴方に言わないことがあるでしょうか。それから彼女は立ち上がって、私の前を行った。私は彼女を賢い女性だと思いこんだ。そして少しずつ、彼女は私をはずれた路地へと導いた。そして私に、私が住んでいるところを示した。私はその家を知らないことに応えたが、しかし、突然、裸の売春婦たちによって、私が今や売春窟に入ったことに気づいた。そして、私はこの老いた性悪女の背信を罵り始めののだが、すでに時を逸していた」。このような策略を、あなたは多くの場所で見るところだろう。その中でもとりわけ、ヴェネツィアとザキュントス島においては、男が自分自身の妻の取り持ちとなるのが普通のことである。あなたが下船し、上陸するやいなや、滑稽な詩人が述べているように、

これが売春婦のやり口です。

奴隷と召使い女を港へ行かせます。

外国の船が港に入ってくると、

どこから来たのか、持ち主は誰かと尋ねさせます。

そのあとすぐに、くつついて離れません。

[プラウトゥス『メナエクス兄弟』〈338-42.〉]

これらの白い悪魔たちは、自分の売春宿の亭主、女将、取り持ちをあらゆる場所に配して見張らせ、新参者と愚かな旅人を待ち伏せして誘いこみ、顧客を探して連れこむ。そして、ひとたび彼らが彼女たちの手中に落ちると、ジル・ド・メジュールがウェアリウス・フラックス〈『アルゴ船物語』〉についての注釈において描いているように、「約束と愉快的な会話によって、贈り物と印によって、機会を捉えて彼女たちは、ルクレティアが逃れることのできない網を、ヒッポリュトス自身が飲みこむような餌を置き、ひどく激しい襲撃と攻撃をおこなうので、処女性の女神さえもそれらに耐えることができない。すなわち、贈り物と誘惑物を与えてベネロペを動かし、脅迫によってスザンナを怖がらせるのである。いかに多くのプロセルピナを、プルトは従者たちによって連れ去るのだろうか。これらは触った魂が冥土に降りていくという催眠棒や、くつついた精神の翼が飛びさることができない膠や鳥もちのようなもので、悪魔の使いたちが誘惑し教唆する、云々」。多くの若い男女が、まったく疑いもなく、これらのエウメニデスとその仲間たちによって誘い込まれる。しかし、これらはありふれた、よく知られたことである。もっとも悪賢く、危険で、狡猾な売春宿の女将は、当世イングランドの悪辣な医師、偽医者、ミサ司祭、修道士、イエズス会士〔〈フレイク〉『イエズス会の説教と実践』(1630年刊)の所業を見よ]、托鉢修道士である。ヒポクラテスの誓いに背いているが、医者たちの幾人かは座薬を与え、処女膜を再生し、しかも危険なくできると約束し、必要ならば墮胎し、胸を小さくし、妊娠を妨げ、情欲を増進させ、催淫剤によって奮い立たせ、そして時折、自分自身で方策を講じる。どんなに固く閉じられた修道院も、すっかり秘匿された家屋も、しっかり護られた監獄も、これらのご立派な者たちには、判断を下し、問診を行い、枕元で脈をとることが、そしてすべてが、医療行為という口実の下に許されている。ところで、修道士、聴聞司祭、托鉢修道士については、彼〔エネア・シルヴィオ・ピッコローミニ〕が述べているように、

冥界のプルトさえも、放埒な修道士と、欺瞞に満ちた

老女が試みようとするのを、敢えて試みようとはしない。

〈ヴァルタ編『格言集』17259.〉

彼らは自分自身の欲望を、また雇われて他人の欲望を、あるいは両者の欲望を満足させるために、このような優れた手段を所有している。というのは、彼らは巡察、聴聞告白、慰安、懺悔という口実のもとに、自由に出入りして、多くの人々を——神がその数をご存知である——を墮落させるからである。彼らの幾人かはこのような商売をして、医術を施し、悪魔祓いをおこなう、等々。

かつては妖精がよく歩いていた場所を  
今や托鉢修道士自身が歩いており、  
どの茂みの中にも、どの樹木の下にも  
托鉢修道士のほかにはいっさい悪霊はいません。

[チョーサ『カンタベリ物語』『パースの女房の話』〈874-75, 879-80.〉]

ドフィーネとサヴォワの山間地では、托鉢修道士たちが善良な妻たちを説得して、自らが悪霊に取り憑かれたふりをさせたので、夫たちは彼女たちに、自由に托鉢修道士のもとに通うことを許した[アンリ・エティエンヌ『ヘロドトスのための弁明』第1巻第21章]。そして、日が経つうちに、托鉢修道士たちは彼女たちの幾人かと親しくなり、ある者[バレ]が述べているように、「ふしだらな女たちは、魔法を使う托鉢修道士たちのゆえに自分の寝台で眠れなくなった」。ボツカッチョ〈『デカメロン』9.2.〉の善良な女子修道院長は、この種の証言をしており、彼女が朝早くに起き上がると、誤って、自らのヴェールや帽子の代わりに、托鉢修道士の下穿きを被ってしまった。私が思うには、あなたはパウリナの物語[ヨセフス『ユダヤ古代誌』第18巻第4章]を聞いたことがあるだろう。すなわち、ヘゲシッポス〈『ユダヤ戦争について』2.4.〉において、この貞淑な婦人を、イシスの神官たちの一人が若い騎士のムンドゥスに売り渡して、彼がアヌビス神だと彼女に信じ込ませた。このような多くの悪戯を我々のイエズス会士たちはおこない、彼らはある時は自分自身の衣服を、またある時は他人の衣服をまとい、戦士、宮廷人、市民、学者、伊達者、そして女性自身になりすます。彼らは海神プロテウスのようにあらゆる姿に変化し、偽装して、夜になると街に出て、若い女性たちを誘って欺き、あるいは、他の男たちの妻と快樂に耽る。そして、もし我々が、ある話[〈カンピリオン『ユダヤ人たちの隠された熱意について』〉アウクスブルク、1608年刊]を信じることができるならば、彼らはこの目的のために、彼らの学院に何着もの衣服で満ちた衣装箆筒をもっている。しかしながら、公衆の前では、彼らは多大な熱意を装い、きわめて敬虔な人物に見せかけ、姦通や密通を厳しく非難する説教をおこなう。どの国でも、「神に供すべき自らの魂を悪魔に捧げている」売春宿の女将や亭主ほど酷い者はいない。

最後の痛烈な術策は媚薬、護符、呪文、魔法、画像、そしてこのような不法な手段であり、もし売春宿の女将、ボン引き、そしてこうした手合いの助けが功を奏することができなければ、彼らは悪魔自身に救いを求めて飛び込むだろう。私は、悪魔がこのような事柄をおこなうということ否定する人々がいることを知っており(クラト『医術的な忠告と書簡』第2巻と多くの神学者たち)、私が先に述べたように、両眼に由来するもの以外に魅了するものは存在しない。そして、もしあなたがより多くのことを知りたければ、カメラリウス『分割された時の所産』第2巻第5章をお読みいただきたい。古い話によれば、あるテッサリアの小娘がフィリッポス王に魔法をかけて、自分に耽溺させ、媚薬によって彼の愛を強めた。しかし、王妃のオリンピアが卓越した美

しさと高い教養をもって成長した召使いを見たとき、彼女は、これらがフィリップス王を誘惑した媚薬であった、と言った〈プルタルコス『結婚訓』23.〉。真の魔法とは、次のヘンリへのロザモンドのものである。

あなたの唇から出る一つの言葉が血を沸き立たせる、  
あらゆる媚薬、祈禱、魔法よりも。

[マイケル・ドレイトン『イングランド英雄書簡集』

〈「ヘンリ2世からロザモンドへ」93-94.〉]

アレティーノ[[『ナンナとアントニアの話』バルト訳『ポルノディダスカルス』]]におけるルクレティアが自慢するには、このことだけによって、彼女はすべての哲学者、占星術者、錬金術者、魔術師、妖術師、その他の同様な者たちよりも多くのことを為すことができた。薬草とか媚薬について、彼女は扱うことなどできなかった。「私が使った唯一の媚薬は接吻と抱擁で、それのみによって、私は男どもを、我を失った野獣のように吠えさせ、私を偶像のごとく崇拜するように強いた」。我々の時代においては、エラストゥスが自著『ラミアについて』において述べているように、妖術師がこれらの媚薬を製造するのを引き受け、魔法、呪文、魔術的記号、結び目によって、「男性も女性も思いのままに愛させ、また嫌わせるように強制し、大嵐や厄災を引き起こす」、等々というのはありふれた事柄である。

この男はテッサリアの媚薬を売る。

[ユウェナリウス『諷刺詩集』〈6. 610-11.〉]

聖ヒエロニムスは、それらが可能であることを証言しており、(『書簡集』第3巻「ヒラリーオンの生涯」において)彼は、媚薬によって、少女を自分への愛の狂気に陥らせた若者について語っている。この少女はのちにヒラリーオンによって癒された。このような例を私は、ヨハン・ニーダーの『フォルミカリウス』第5巻第5章において見いだす。プルタルコスはルクルスについて、彼が媚薬のために死んだと、そして、クレオパトラが他の誘惑物にも増して、媚薬を用いてアントニウスを誘惑したと述べている。エウセビオスは詩人のルクレティウスについて多くのことを伝えている。パノルミータは『アルフォンス王言行録』第4巻において、ステーファノというナポリの騎士について、彼が媚薬によって愛の狂気に陥らされたことを語っている。しかし、他のものにも増して、もっとも記憶すべきは、ペトラルカが『親近書簡集』第1巻第5〈正しくは第3〉書簡において、カール大帝について語っていることである [コルンマン『死すべき者たちの奇跡について』第1巻第14章に拠る]。すなわち、大帝は愚かにも、ある卑しい外見と境遇の女性を溺愛して、何年も一緒に過ごし、彼女の傍に居ることを心から喜んでいて、彼の友人たちと従者たちに大きな嘆きと怒りをもたらしていた。彼女が死ぬと大帝は、月桂樹となったダブネをアポ

ロンが抱いたように、彼女の遺骸を抱いた。そして彼は、彼女の（かぐわしい芳香で満たされ、宝石で飾られた棺）を、自分とともに運ばせるように命じて、いつもそれに向かって嘆いていた。ついに、大帝の宮廷に仕えていた崇敬すべき司教が（彼の主人にして雇い主の状態を憐れんで）、この狂気じみた情熱の真の原因を知るために神に熱心に祈りを捧げた。そして、その結果として、最後に司教に明らかにされたのは、「皇帝の狂気の愛の原因は死んだ女性の舌の下にある」ということだった。司教は急いで死骸へ向かい、そこに小さな指輪を見つけた。それと取り去ると、皇帝は死体を忌み嫌って、その代わりに、この司教への激しい愛に陥った。そして司教が彼の面前から離れることを容赦しなかった。司教はこのことに気づくと、王が滞在していた大きな湖の中央に、その指輪を投げ入れた。そのときから、皇帝は自らの他の住居をすべて顧みず、アーヘンに居を定めて、沼地の中央に、膨大な出費をして豪勢な館を建て、その隣に聖堂を建てた。そこに、のちに彼は埋葬され、そして、それ以来、彼の子孫はすべてこの都市において戴冠された。異端者マルクスは、若い少女をこの手段によって誘惑したとして、イレネウスから告発されている（『異端者駁論』1. 12.）。そして、幾人かの作家は、キャサリン（正しくはエレノア）・コバム嬢について、彼女が同じ術によってグロスタ公ハンフリを陥れ、彼女の夫としたと厳しく語っている。シキニウス・アエミリアヌスはアブレイウスを、アフリカの総督クネウス・マクシムスの前に出頭するように呼びだした。というのは、彼は貧しい男だったが、「媚薬によってブデンティッラという老齢で富裕な婦人に魔法をかけ、彼を愛するように」、そして、彼女が何千ものセステルス銀貨を所有しているがゆえに、彼の妻になるように図ったからである。アグリッパ（フォン・ネットスハイム）は『オカルト哲学』第1巻第48章（正しくは第45章）において、この種の多くのことを、媚薬、護符、図像に帰している。サルムトのパンチローリ（『新発見』第10項「時計について」への注解も同様である。レオ・アフリカヌスは〈『アフリカ全土についての書』第3巻〈該当箇所なし〉において、それはアフリカのフェスにおいてはありふれた行為であると述べている。「そこには、愛と性交を引き起こす多くの魔術師が存在している」。彼らはすべて、ヒュペルボレオスの魔術師のようにとても巧妙であり、彼については、ルキアノス（『嘘を好む人たち』第3巻）におけるクレオデムスが、この種のもので彼がおこなった数多くの妙技について語っている。しかし、エラトゥス、ウェイエル、そして他の者たちは、それに反対している。彼らは、このような事柄は起こりうるが、しかし（ウェイエルが『ラミアについて』第3巻第37章で話しているように）、魔法、呪文、媚薬ではなく、悪魔自身によって起こされるのであると認めている。彼は同書第5巻第2章（正しくは第11章）において同様に論じている。同じようにフライタークは『医学の森』第74章で、アンドレア・チェザルピーノは〈『悪魔の道徳学派的探究』第5章において論じており、そしてジグメント・シェラーツは〈『幻影について』「夜の雄山羊について」第9章で詳細に立証している。「身持ちの悪い女性たちは、これらの魔女、悪魔の台所女中の助けを借りて、夜中に愛人を自分のところへ連れてこさせ、山羊の姿をして空中を飛ぶ幻影によって再び送り届ける。私は、彼らが山羊に乗って、夜中に何マイルも飛んで、愛人のもとへ運ばれたという、さまざまな告白を聞いている」。これとは別の見解をもっている



者たちもおり、彼らによれば、多くの者が魔法と媚薬によっておこなわれると想像しているこれらの妙技は、たんに自然的な原因によって惹き起こされるのであり、それは、化学的に調合された人間の血液が、エルンスト・ブルグラーフが『生と死の印による灯火』で述べているように、「愛と嫌悪をもたらすために」きわめて有効である（こうして、猟師は猟犬から、また農夫は雛鳥から自分を好かれるようにする）のと同じである。彼が主張しているのは優れた媚薬であるが、「しかし、公衆に露わにするのは禁じられている」。同じようなものは、狂気の林檎、マンダラゲの根茎〔レメンス『聖書の植物と樹木から採られた比喩と寓意明解』第2章〕、宝石、死者の衣服、蠟燭、バックスの林檎、豚のパン、ヒッポマネス〈生まれたばかりの子馬の前頭部の黒い小さな膜皮、プリニウス『博物誌』8.66.165。ウェルギリウス『農耕詩』3.280。『アエネイス』4.515、ティブルス『詩集』2.4.58、ユウエナリス『諷刺詩集』6.133-44, 615-16.も参照）、狼の尾のある種の毛〔プリニウス『博物誌』第8巻第22章〈正しくは同8.34.83〉、第13巻第25章〈実際は言及されず〉、クインティリアヌス〈『弁論家の教育』第7巻〈8〉〕、等々であり、またそのようなものについて、ラーゼス、ディオスコリデス、ポルタ、ヴェッカー、ロッシ、ミゾー、アルベルトゥス〈・マグヌス〉が論じている。すなわち、燕の心臓、鳩の心臓の粉末、「蝮の舌、驢馬の頭蓋骨、馬の陰莖、新生児を覆う羊膜、吊り下げられた男の綱、鷺の巣の石は大きな効力を発揮する」。さらには、シェンクの『医学的考察』第4巻におけるもの、等々を見なさい。それらは強力で、大きな効力を有しており、たとえば、ウィトルウィウス〔『建築論』第11巻第8章〈12〉〕、オウィディウス〔『変身物語』第4巻〈285-388〉〕、ストラボン〔『地誌』第14巻〈2.16〉〕におけるサルマキスの泉は、その水を飲む者をすべて、愛の狂人にする。また、ドイツのアーヘンの熱い温泉は、かつてクピドが自らの矢を浸したことがあり、それ以来、そこで湯浴みする者をすべて愛する者にするという特別の効力を得ている。しかし、詩人自身のそれについての描写に耳を貸そう。

湿った大地から噴き出す水によるこの熱は何ゆえか。  
かつてアモルがここで遊び、燃える矢を水に浸した。  
そして、不意のジュージューする音に喜び、こう言った。  
それを永遠に沸きたたせ、わが箆の記念としよう。  
それ以来、水は沸きたち、それに浸った者で、魅惑的な愛によって  
心を刺激されないことは稀である。

〔ロドヴィーコ・グイッチャルディーニ『バルギー全土の記述』〕

先に言及した治療法は、幸いにも、アーヘンの温泉や、ウェヌスの魔法の帯と同じ大きな効力をもっている。この帯についてナターレ・コンティ〔『神話学』4.13〕は、こう述べている。「その中に、愛の遊びと戯れ、快楽、甘美さ、説得、精妙さ、優雅な話、そして愛を強めるすべての魔法が含まれている」。これらについて、さらに詳しくは次の書をお読みいただきたい。アグリッ

パ〈・フォン・ネットスハイム〉『オカルト哲学』第1巻第50章と第45章、〈シュプレンガー〉『魔女への鉄槌』第1部第7問題、デルリオ〈『魔術探究』第2書第3問題第2巻、ウェイエル、ボンポナッツィ『魔法について』第8章、フィチーノ『プラトン神学』第13巻、カルカニーニ〈『愛の魔術の摘要』〉、等々。

\*太字表記は原文がラテン語であることを示す。

\*原注には、典拠の該当箇所と、テキストの引用が見出される。典拠は〔 〕内に示し、テキストは訳出に反映し、必要と思われる部分は〔 〕に補った。

\*その他の補注や訳出の補完は〈 〉に示した。

#### テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.

Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

#### 既訳

- 「第1部第1章第1節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第59号 2007 所収  
「第1部第1章第2、3節」 『京都府立大学学術報告 人文・社会』 第60号 2008 所収  
「第1部第2章第1節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第61号 2009 所収  
「第1部第2章第2節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第62号 2010 所収  
「第1部第2章第3節第1-10項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第63号 2011 所収  
「第1部第2章第3節第11-14項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第64号 2012 所収  
「第1部第2章第3節第15節」 『京都府立大学学術報告 人文』 第65号 2013 所収  
「第1部第2章第4節第1-6項」 『京都府立大学学術報告 人文』 第66号 2014 所収  
「第1部第2章第4節第7項-第5節、第3章第1節第1・2項」  
『京都府立大学学術報告 人文』 第67号 2015 所収  
「第1部第3章第1節第3・4項-第3節、第4章」

『京都府立大学学術報告 人文』 第68号 2016 所収  
「第3部 第1章 第1節 第1項 序－第2節 第2項」

『京都府立大学学術報告 人文』 第69号 2017 所収  
「第3部 第1章 第2節 第3項－第2章 第2節 第1項」

『京都府立大学学術報告 人文』 第70号 2018 所収  
「第3部 第2章 第2節 第2-3項」

『京都府立大学学術報告 人文』 第71号 2019 所収

(2020年9月30日受理)

おかむら まきこ (文学部 共同研究員)

いとう ひろあき (専修大学 教授)

